

## 事例 22

### タイトル：不安におしつぶされそうになって

#### ・<事例の状況>

男性。杖なしで歩行可能ではあるが、ゆっくりとしか歩けない。コンピューター操作が得意だったのに、右手が思うように動かない。字を書いても字にならない。話をしたいのに言葉が出てこなく、一生懸命考えているうちに、何を話そうとしていたのかわからなくなってしまふ。

買い物に出かけ欲しいものを購入して、レジに並ぶがいくらお金を出せばいいのかわからなくなりお札を出す。しかし相手に多くとられ、いつかお金がなくなって貧乏になってしまうと不安になってしまう。それが高じてか妻に生活費を渡すことができなくなってしまった。妻は離婚を提案。それ以降、妻に執拗にまとわりつき性行為を絶えず求め続け、恐怖感にとらわれた妻からすっかり嫌われてしまふ。

#### ・<この事例で課題と感じている点>

絶え間ない認知症についての周知活動の必要性和、受容の困難さ

#### ・<キーワード>

不安です

#### ・<事例概要>

【年齢】 70歳代前半

【性別】 男性

【職歴】 機械の設計

【家族構成】 妻と子供二人

【認知機能】 不明

【要介護状態区分】 要介護1

【認知症高齢者の日常生活自立度】 b

【既往歴】 脳梗塞・糖尿病・高血圧症

【現病】 アルツハイマー型認知症・糖尿病・高血圧

【服用薬】 メディット・ファスティック・バイアスピリン・デパス・ノルバスク

【コミュニケーション能力】 視力・聴力に問題なし。スムーズに言葉が出てこず、自分の考えをうまく伝えることができずイライラしていることが多いが、ゆっくりとなら会話が可能。

【性格・気質】 几帳面・まじめ

【ADL】 自立

【障害老人自立度】 J2

【生きがい・趣味】 コンピューター操作

【生活歴】 学校卒業後機械設計の職に就き30歳代で結婚し二児を授かる。妻は専業主婦。定年まで就労。60歳代後半ろれつがまわらなくなり受診、脳梗塞と診断。右半身に軽度の麻

痺と筋力低下が生じ、リハビリ病院に転院。70歳代頃から物忘れ症状が著明となり家に閉じこもるようになる。

この頃から貧困妄想にとらわれ妻に生活費を渡さなくなり、困り果てた妻が生活費捻出のためパート勤めをはじめ。子供の勤めもあり認知症外来に相談。本人もその後受診し認知症と診断される。

近年では、コンピューター操作もうまくいかないことが多くなりイライラが一層激しくなる。また妻に執拗にまとわりつき、常時性的交為を求めようになり、不安と恐怖にとらわれた妻が包丁を持ち上げ「殺してやる」と激昂。そういう自分に恐れおののいた妻が近くの相談機関に「助けて欲しい」とかけこんでくる。

【人間関係】 以前から他人と交わることが苦手であったが、特段他人とトラブルを起こすこともなかった。

【本人の意向】 運動器具を使用したりリハビリをすると以前の自分を取り戻すことができると考え、介護保険利用を拒否し介護予防事業の筋力アップ教室に継続的に参加したいと希望している。

【事例の発生場所】 自宅